

我が家の事情

朝倉 一郎^{*1}
Asakura Ichiro

さて、随想を書けとのご下命をいただいた。何をどう書いたものかと思いを巡らせる日々が続いた揚句、所詮、ウンチクなど垂れる柄ではなく、「締切が全てを支配する」定めに従って動くしか術を知らない者の文章である。IIC REVIEW の品格を汚さぬものとなれば幸いである。

ところで「随想」って何だ？と疑問がわいた。調べてみると、「日々折に触れて思うこと。」とある。日々思うことだったら沢山あるぞ。乗換えで急いでいるのに、前行くスマホ歩きに行く手を阻まれ、人込みの中、かわすこともままならない。こんな時など、蹴飛ばしてやりたいとか…。品格を問われるような「思うこと」ばかりである。

所詮、日々の思いなるものはこの程度で、世の中で立派な方、偉い方といわれる方にしても似たようなものなのではないだろうか。そうではないかもしれないが、そうであって欲しいと願っている。そうでないと人間味に欠ける。味気ないじゃないかと思う。

スマホ歩きが最近問題になっている。もともと、私は歩くことが好きではない。ましてやスマホ歩きなどできない。人込みの中でも歩けるのだから、それはそれでたいしたもんだとも思う。

歩くといえば、家内は毎日の散歩を欠かさない。それも犬を連れて歩く。我が家に猫はいるが犬はいない。ご近所の農家の犬を連れて歩いているのである。

神奈川の三浦の農家は忙しい。夏はスイカ、メロン、カボチャ。収穫に追われ息つく暇もない。休む暇もなく冬に向けてキャベツ、ダイコンが始まる。朝早くから働き始め、市場に出荷して帰って来るのは夜中である。忙しくて愛犬と散歩する暇はない。家内が代役をやっている。お土産にその日採れた野菜をもらってくる。それが食卓に並ぶ。

そういえば、「ああ、よく歩いてるな」と思う犬は皆無になった。後足の張りですぐわかる。ペットの数が人口を上回る時代になったと聞く。そのうちペット用トレーニングジムができて人気になるかもしれない。老夫婦がジムに行き、ランニングマシーンで走る愛犬の姿を見て微笑む。犬にとっては迷惑かもしれない。

そこに行くと、猫は放し飼いがいい。ペットショップでどんなに高い値段で買った猫でも外で自由に駆け回らせてやるべきだ。外に出ると、まず土の上に寝転がる。背中を土に擦りつけるよう

*1：取締役 検査事業部長

にである。その後、猫社会の中で勝ち取った自分の領土の点検に出かける。

我が家に猫が来たのは父が関係する。父は獣医だった。とある夜、晩酌中の父に命ぜられ屠殺場まで運転手をやったことがある。そこで見た光景は衝撃的だった。以来、牛肉を見ると吐き気がした。私はナイーブなのである。戦争体験はないが、戦場とはああいうことをいうのかもしれない。しかし、大抵の問題は時間が解決してくれる。2～3年もしたら元通り。今では牛肉も大好物である。物事には、忘れていいことといけないことがあるのかもしれない。

というような訳で、父は元々乳牛専門だったのだが開業してペットも診るようになった。因果な商売で、飼えなくなったペットまで持ち込まれる。里親探しは珍しくもないボランティアだったようだ。そんな中の1匹が我が家に来ることになった猫のルーツなのである。

今、我が家にいるのは、その猫の子供を含め4匹である。この猫の人間関係、いや猫関係が複雑なので記しておきたい（本稿ではこのうち3匹について書く）。我が家には南北問題が存在している。といっても貧困問題ではない。猫の領土問題である。

家の南側を占めているのが里親になった猫の子孫（以下「子孫猫」）。北側の玄関から2階を占めているのが、家族で唯一、父の最期を看取った猫である（以下「黒猫」）。父が逝き、しばらくは行方がわからなかった。私との面識は薄い。10日も経ったであろうか、ある夜、真っ黒なその猫は暗闇の中からひっそりと私の足元に現れ、自ら檻に入った。故に、父が住んでいた実家から250km

も離れた我が家に来ることになったのである。

しかし、この「黒猫」の「子孫猫」に対する敵愾心は半端なものではない。迫力が違う。網戸が閉まった出窓で寝ていた子孫猫を見つけ、庭から飛びかかったことがある。網戸に大の字で張り付いた様は太めのムササビ。2m近い大ジャンプである。まるでマンガの世界だ。そんな訳で、同じ家にいながらも一緒に暮らすことは叶わず南北問題が出現した。和解の時は来るのだろうか。血筋の問題は、時間でも解決してくれそうもない。

そこに絡むのが、最近加わった通称「ケム」である。とにかく大柄な猫である。手足・首・尻尾は子孫猫の華奢な感じとは正反対で極太。猫がライオンと親戚なのも納得の風体をしている。耳はピンと立ってスターウォーズのヨーダのようだ。性格は、傍若無人で鈍感。髭を引っ張っても尻尾をつかんでも、ウンともスンともいわない。しかしである。試しに近づいて息を殺してみると、忽ち目を見開き、振り返って「にゃー」という。体が大きい割に、猫同士の喧嘩には滅法弱い。その割には好きなのだろう、怪我が絶えない。

特筆すべきは、あの「黒猫」と、いさかいが起きないのである。平気で南北境界を越える。黒猫の方が一歩退く。逆に「子孫猫」には邪険にされている。子孫猫に摺り寄るのだが、猫パンチをベシッと喰らって、しょぼんとしている。

南北境界を越えるということは「ケム」にとって大きなメリットがある。南で子孫猫のご飯を平らげ、北で黒猫のご飯を平らげるのである。

大体、最近の猫は贅沢である。昔はご飯に味噌汁をかけてやればことが足りた。サンマの骨なん

か付けば「ウォー」っていいながらガツガツ食ったものだ。それが今はどうだ。トリ・ササミだか、イクラ・シラウオだか知らないが専用キャットフードを食う。高級料理である。それもお気に召さなければ食べてくれない。それを全部「ケム」が平らげる。私は味噌汁かけご飯を平らげる。

「ケム」が我が家に来たのは半年ほど前である。庭に現れ夕飯をねだり、食べるとどこかに消えるという日が繰り返された。最初は食べに来るのも時々だったのが、毎日になり、そのうち、徐々に家に上がりこむようになった。

大人猫である。どこぞの飼い猫かもしれない。そうでなくとも我が家には猫がいる。冗談じゃないと思っていたある日、家内が「ケム」の様子がおかしいという。おでこに触ってみると熱い。まずいと思ったが人道上、いや、猫道上の問題である。「病院に連れて行ってよ」といつってしまった。これが運の尽きである。

大体、獣医なんてものはいいい加減なものだ。あそこが痛い、ここが痒いかゆと言葉が通じる人間の医者だって誤診が絶えないのに、物もいえない動物相手に、しかも内科・外科・皮膚科・泌尿器科・・・、哺乳動物のみならず、鳥は来るは、ひよっとしたらカブトムシまで持ち込まれるかもしれない。そんな医者が全てにおいて的確な診断などできる訳がない。求める方が間違っている。獣医が診てい

るのは飼い主なのだ。

当社なら絶対こういうことはない。製品に正しく向き合い、正しい検査・計測を行い、正しく評価する。誠実に愚直に向き合う姿勢を貫き通している。

家内には「リングルだけでいいから点滴してもらって。体力回復しかないから・・・」といったのだが、治療費については聞いていない。洩れ聞もくところによると家計にインパクトが出たようだ。しわ寄せは私のおこづかいを直撃する。かくて莫大ばくな投資を得て回復した「ケム」は我が家の一員となった。

ご下命の「随想」に許される文字数もオーバーしてしまった。少々唐突ではあるが、ここら辺で無理やりまとめることにする。血統で行くのか、力で行くのか、鈍感で行くのか、我が家の猫は3種3様ながらも、それぞれが、それぞれの味を出しながら、秩序を守って、それなりに仲良く暮らしている。会社も同じようなものだと思う。いろんな人が集い、目的を持って、切磋琢磨せつさたくましている。

私もそろそろ還暦を迎える。私がこれまでしてきた数えきれない失敗のうち、しなくて良い失敗は繰り返さない方が良い。次の時代を担い、日々頑張っている方々に、少しでも、お役にたてればいいなと思うこの頃である。



取締役
検査事業部長
朝倉 一郎

TEL. 045-791-3523
FAX. 045-791-3547